

日本人大学生の社会的行動特徴としての甘えと 文化的自己観の関連

淡野将太・前田健一

The relations between amae as a social behavior of Japanese college students
and cultural construal of self

Syota Tanno and Kenichi Maeda

Amae has been discussed as a social behavior of Japanese people. The authors reviewed an antecedent study which developed amae scale and indicated the problems of amae questionnaire of the study and developed new amae questionnaire which consisted 2 subscale 11 item structure whose subscales were "sunaona-amae" and "kussetusita-amae". Results of α coefficient, confirmatory factor analysis, and *k-s* test demonstrated each internal consistency, factorial validity, and normal distribution of two subscales and whole amae questionnaire (study 1). Correlation between "sunaona-amae" subscale and affiliation motives, and between "kussetusita-amae" subscale and anger demonstrated the validity of two subscales (study 2). "Sunaona-amae" subscale and "kussetusita-amae" subscale positively correlated with interdependent construal of self and negatively correlated with independent construal of self. It was demonstrated that the amae was a aspect of interdependent construal of self by the factor analysis which indicated "sunaona-amae", "kussetusita-amae", and interdependent construal of self were same factor and independent construal of self was another factor (study 3). Finally, the use likelihood of the amae questionnaire was discussed.

Key Words: amae, affiliation motives, anger, interdependent construal of self,
independent construal of self

キーワード: 甘え, 親和動機, 怒り, 相互協調的自己観, 相互独立的自己観

問 題

われわれは、日常生活において、親や友人や恋人に甘える。また、会話においても“お言葉に甘えまして”“いつまでも甘えてないで”といった表現を用いる。さらに、対人関係に留まらず、子犬に対しても“この子は甘える”といった表現を用いる。このように、日本においては、甘えるという行動は日常生活で頻繁に行われ、甘えという言葉は日常語として用いられる。土居（1971）は、甘えを日本人のパーソナリティ構造、精神構造および社会構造を理解するための鍵概念として取り上げ、“甘えとは、人間存在に本来つきものの分離の事実を否定し、分離の痛みを止揚しようとする”と定義した。しかし、この定義は多義的で曖昧であるため、何を甘えとするかについての見解が分かれ、定義をめぐる多くの議論を招いた（北山, 1999; 竹友, 1988; 李, 1982）。このような経緯から、土居（2001）は、“甘えとは、対人関係において相手の好意をあてにして振る舞うこと”と再定義した。一般に甘えとは、他者との情緒的結びつきを求める欲求および感情のことであり、子どもの親に接する態度や行動を指す場合が多い。しかし、土居（2001）は、甘えは母子関係だけではなく成人同士の対人関係においても広く当てはまるものであり、日本人の社会的行動特徴のひとつであると指摘した。

日本人の社会的行動特徴は、甘えに関する土居の一連の研究（土居, 1971, 1975, 1985, 1987, 1989, 1993, 1997, 2001）をはじめ、比較文化研究や社会心理学の研究領域において論じられてきた。比較文化研究の領域では、洋の東西によって文化的自己観を分類し、その分類の中で日本文化が分析されてきた（北山・宮本, 2000）。文化的自己観とは、文化において歴史的に作り出され、共有されている人の性質についての共通理解であり、文化の中で育まれる心理的プロセスの性質を規定するものである（Markus & Kitayama, 1991）。文化的自己観には相互協調的自己観と相互独立的自己観がある。日本を含む東洋の諸文化は、相互協調的自己観が優勢であることが指摘されている。相互協調的自己観とは、自己は他の人や周りの事物と結びついている関係志向の実体であり、ある特定の状況や他者の性質によって大きく異なる、という自己観である。つまり、人間同士の関係性の上に自己が存在することが特徴である。他者との情緒的結びつきを求める甘えは、相互協調的自己観の側面として位置づけられている。一方、西洋の諸文化は、相互独立的自己観が優勢であることが指摘されている。相互独立的自己観とは、自己は他の人や周りの事物とは区別され周りの状況とは独立して存在している、という自己観である。つまり、自己の上に人間同士の関係性が成立することが特徴である（北山・唐澤, 1995; 北山・宮本, 2000; Markus & Kitayama, 1991）。また、日本人特有の対人行動や対人感情として、恥の文化および罪の文化（Benedict, 1946 長谷川訳 1951）、タテ社会およびヨコ社会（中根, 1967）、集団我（南, 1983）、間人主義（浜口, 1988）、集団主義（Triandis, 1995）、社会中心性（Shweder & Bourne, 1984）などが社会心理学の領域において論じられてきた。日本文化に関するこれらの理論的分析は主に、日本人の社会的行動特徴は、他者との関係性の影響を受けやすいことで一致している。甘えについても、その表出が他者との関係性に左右されることが指摘されている（土居, 1971）。

日本人の社会的行動特徴としての甘えと、甘えに連動した心理的傾向を探索することは、日本人の対人関係や行動様式の特徴を理解する際に必要であると考えられる。近年のカウンセリング理論においても、クライアントの文化的背景を考慮して行う多文化カウンセリング（multicultural

counseling: Sue, Ivey, & Pedersen, 1996) の枠組みが提案されており、日本人の社会的行動特徴としての甘えに関する基礎的知見を系統的に提出することの意義は高い。甘えを数量化して捉える試みは、藤原・黒川 (1981) によって行われているが、後述するように、この甘え尺度は実用性に欠け、土居 (2001) の定義による甘えを測定していないという問題点がある。そこで本研究では、日本人大学生を対象とした調査によって甘えの個人差を測定する尺度を作成し、信頼性および妥当性を検討する。また、甘えが相互協調的自己観の一側面であることは実証的に示されていないため、作成した甘え尺度を用いて、日本人大学生の社会的行動特徴としての甘えと文化的自己観との関連を検討することにより、甘えが相互協調的自己観の一側面であることを実証する。

研究 1 甘え尺度の作成

目 的

藤原・黒川 (1981) は、対人関係において甘える行動を表す 10 語の動詞 (e.g., 相談したい)、甘える状況として 11 の場面 (e.g., けんかをしたとき)、甘える対象人物として 12 の対象人物 (e.g., 親友) を設定し、甘え尺度を作成した。これは、個人の甘えは、個人のおかれた状況と甘える対象人物によって大きく左右されるため、甘え尺度の構成には、甘える行動、甘える状況および甘える対象人物を記述する必要があるためである。しかし、この甘え尺度は、質問項目を甘える行動、甘える状況および甘える対象人物の順列組み合わせによって構成するため、すべての項目を用いた場合に 1320 項目の尺度となる。そのため、藤原・黒川 (1981) の甘え尺度は、全項目を用いて甘えを測定することは事実上不可能であり、実用性に欠けた尺度である。

また、土居 (1971, 2001) は、甘えには相互的な信頼を軸にした健康で“素直な甘え”と、自己愛的で“屈折した甘え”のふたつがあると指摘している。“屈折した甘え”とは、個人が甘えたくても甘えられない状況において抱く、すねる、うらむなどの感情である。藤原・黒川 (1981) の甘え尺度は、“素直な甘え”に該当する 1 因子で構成されており、“屈折した甘え”を捉える項目は含まれていない。

研究 1 では、藤原・黒川 (1981) の甘え尺度の問題点であった項目数の多さと甘え尺度の 1 次元性を改善する。そのため、質問項目数を限定し、“素直な甘え”と“屈折した甘え”の 2 次元で甘えを測定する甘え尺度を作成する。

方 法

対象者 調査は、関西および関東の大学 8 校で実施した。欠損値のない回答のみ分析の対象とした。そのため、分析対象者は 358 名 (女性 229 名, 男性 129 名)、平均年齢 20.44 歳 ($SD = 1.55$) となった。調査の実施時期は 2005 年 5 月から 6 月であった。

甘え尺度の構成 甘え尺度の下位尺度として、“素直な甘え”と“屈折した甘え”の 2 つの下位尺度を仮定した。質問項目は、藤原・黒川 (1981) の甘え尺度および土居 (1971, 2001) の記述を参考に、日常生活において大学生が経験しやすいと考えられる甘える行動および甘える状況を設定

し、甘える対象をすべて“人”に統一した項目を作成した。計 16 項目から成る質問紙を作成した。評定はすべて 6 段階評定法（全くあてはまらない：1，あまりあてはまらない：2，どちらかといえばあてはまらない：3，どちらかといえばあてはまる：4 かなりあてはまる：5，とてもよくあてはまる：6）で行い、回答に要した時間はおよそ 10 分であった。

結果と考察

因子的妥当性 各項目の度数分布を確認したところ、平均値±1SDが得点可能範囲の最大値および最小値を超える天井効果および床効果を示す項目は見られなかった。そこで、全 16 項目において最尤法による因子分析を行った。その結果、固有値の推移から因子数を決定するスクリープロット基準および固有値が 1 以上の因子を採用するガットマン基準から、2 因子解が妥当であると判断した。次に、最尤法プロマックス回転による因子分析を行った。その結果、因子負荷量が.40 未満の項目が 5 項目（項目番号 2, 3, 5, 11, 15）確認されたため、この 5 項目を削除した。その後、再び最尤法プロマックス回転による因子分析を行った。その結果、.40 以上の因子負荷量で 2 因子 11 項目が抽出された。甘え尺度の項目および因子分析における因子負荷量と共通性を TABLE 1 に示す。第 1 因子は、“悩みごとがあるときは誰かに相談したい”などの 5 項目から成り、“素直な甘え”とした。第 2 因子は、“人に優しくしてもらえないとすねる”などの 6 項目から成り、“屈折した甘え”とした。信頼性係数を算出したところ、“素直な甘え”は $\alpha = .82$ ，“屈折した甘え”は $\alpha = .79$ ，甘え尺度全体では $\alpha = .83$ であり、各下位尺度および甘え尺度全体での信頼性が示された。最後に、2 因子 11 項目における甘え尺度の適合度を算出した。その結果、GFI = .95, CFI = .95, RMSEA = .07 となり、採用し得る適合度が得られた。これらの結果から、甘え尺度の因子的妥当性が確認された。

TABLE 1 甘え尺度の項目および因子分析における因子負荷量と共通性

No.	項目	F1	F2	h^2
9.	悩みごとがあるときは誰かに相談したい	.76	-.08	.58
7.	悲しいことがあったときは人に慰めてもらいたい	.74	.06	.55
1.	不安なことがあるときは人を頼りにしたい	.71	.02	.51
16.	落ち込んでいるときは元気づけてほしい	.70	.05	.49
13.	授業の内容がわからないときは誰かに教えてもらいたい	.56	-.04	.32
12.	人に優しくしてもらえないとすねる	.06	.76	.58
14.	困ったときに誰も頼りにできないとやけになる	.04	.64	.41
6.	自分の意見や要望が通らないと相手をうらんでしまう	-.14	.63	.42
4.	わがまを聞いてもらえないとふてくされる	.00	.62	.38
10.	何かで大変なときに人が助けてくれないと愚痴をこぼす	.12	.60	.37
8.	自分だけ怒られたときはひがみたくなる	.12	.48	.25
因子間相関				.38

得点分布の正規性 “素直な甘え”，“屈折した甘え”および甘え尺度全体の得点分布を FIGURE 1, 2, 3 に示す。“素直な甘え”の得点分布（得点可能範囲：5 から 30）は， $M = 20.69$ ， $SD = 5.02$ ，

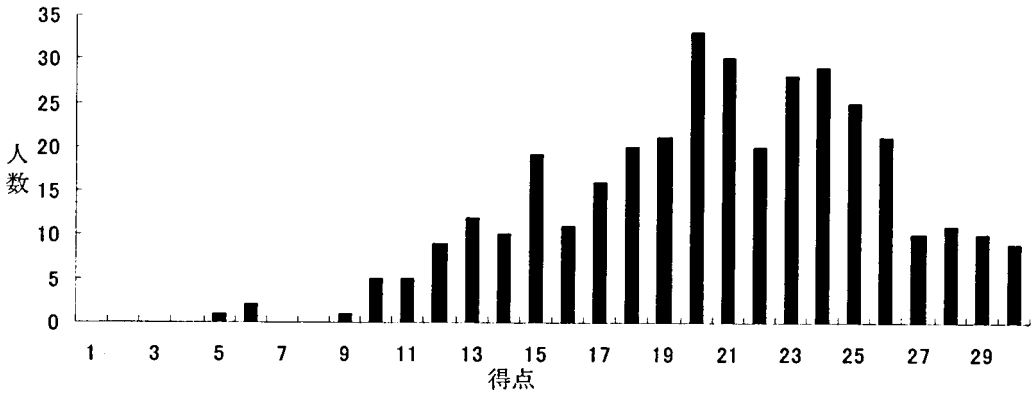


FIGURE 1 素直な甘えの得点分布

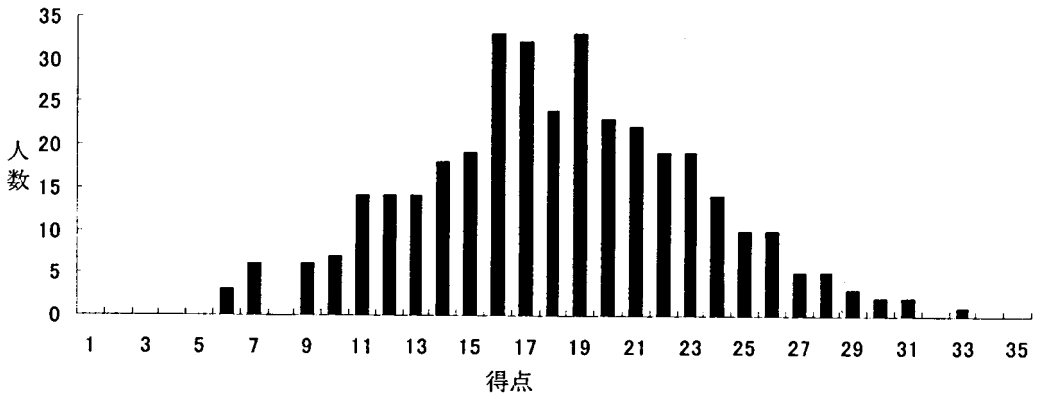


FIGURE 2 屈折した甘えの得点分布

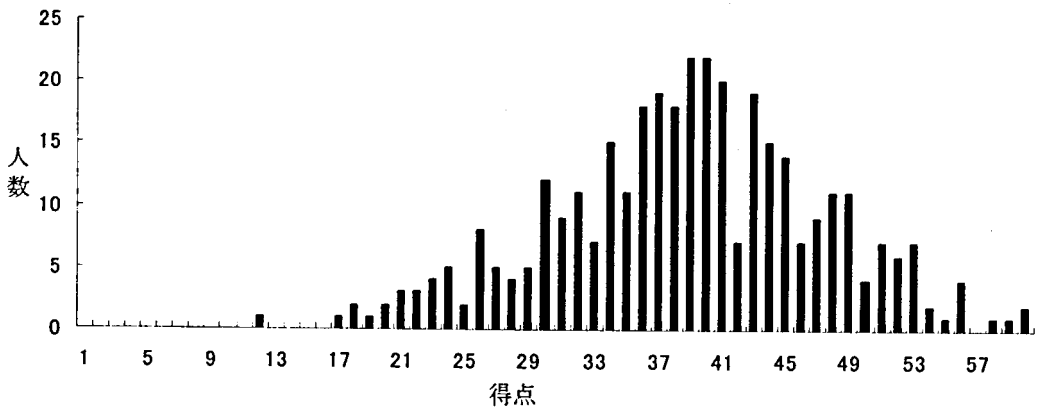


FIGURE 3 甘え尺度全体の得点分布

最大値 = 30, 最小値 = 5, 歪度 = $-.36$, 尖度 = $-.27$, “屈折した甘え” の得点分布 (得点可能範囲: 6 から 36) は, $M = 18.15$, $SD = 5.05$, 最大値 = 33, 最小値 = 6, 歪度 = $.07$, 尖度 = $-.13$, 甘え尺度全体の得点分布 (得点可能範囲: 11 から 66) は, $M = 38.83$, $SD = 8.44$, 最大値 = 60, 最小値 = 12, 歪度 = $-.19$, 尖度 = $.01$ であった。“素直な甘え”, “屈折した甘え” および甘え尺度全体の得点分布の正規性に関して, コルモゴロフ・スミルノフ検定を行った。その結果, “素直な甘え”, “屈折した甘え” および甘え尺度全体において, 得点分布の正規性が確認された。(“素直な甘え”: $D = .08$, “屈折した甘え”: $D = .06$, 甘え尺度全体: $D = .06$, いずれも $p < .01$)。

甘えの性差 “素直な甘え” および “屈折した甘え” の記述統計量および性差を TABLE 2 に示す。“素直な甘え” および “屈折した甘え” の性差に関して t 検定を行った。その結果, “素直な甘え” においては, 女性が男性よりも有意に高く ($t(356) = 5.99$, $p < .01$), 過去の知見 (藤原・黒川, 1981) と一致する結果となった。“屈折した甘え” においては, 男女に有意な差は見られなかった ($t(356) = 1.47$, $n.s.$)。

TABLE 2 甘え尺度の記述統計量および性差

下位尺度	α	全体 ($n = 358$)	女性 ($n = 229$)	男性 ($n = 129$)	性差 (t 値)
素直な甘え	.82	4.12 (1.00)	4.16 (0.93)	3.70 (0.97)	5.99 **
屈折した甘え	.79	3.03 (0.84)	3.11 (0.84)	2.92 (0.89)	1.74 $n.s.$

** $p < .01$

研究 2 甘え尺度の妥当性の検討

目 的

研究 2 では, 甘え尺度の妥当性を検討する。甘え尺度の妥当性は, “素直な甘え” および “屈折した甘え” と関連した心理的傾向との相関を検討することにより行う。

“素直な甘え” の妥当性に関しては, 親和動機との相関を検討することにより行う。親和動機には, 分離不安から人と一緒にいたいという気持ちを表し, 他者からの拒否に対する恐れ of 要素を持つ “拒否不安” と, 拒否に対する恐れや不安なしに人と一緒にいたいと考える “親和傾向” のふたつの性質が存在する (杉浦, 2000)。“素直な甘え” が高い個人は, 他者との相互作用の中で相手の好意をあてにしたいと考えるため, 他者からの拒否に対する恐れを表す “拒否不安” と, 人と一緒にいたいと考える “親和傾向” が高いと考えられる。したがって, “素直な甘え” と “拒否不安” および “親和傾向” との間には正の相関が予想される。

一方, “屈折した甘え” の妥当性に関しては, 怒り感情との相関を検討することにより行う。怒りの個人的傾向には, 怒りの喚起されやすさを表す “怒りの喚起されやすさ” と, 怒りの持続しやすさを表す “怒りの持続しやすさ” のふたつの傾向がある (渡辺・小玉, 2001)。“屈折した甘え” が高い個人は, 他者から好意を享受できなかった際に, 怒りを喚起し, その怒りを持続する, つまり, 個人的傾向である “怒りの喚起されやすさ” および “怒りの持続しやすさ” が高いと考えられる。したがって, “屈折した甘え” と “怒りの喚起されやすさ” および “怒りの持続しやすさ” との間に

は正の相関が予想される。

方 法

対象者 調査は、奈良県内の大学および短期大学で実施した。欠損値のない回答のみ分析の対象とした。そのため、分析対象者は172名(女性146名, 男性26名), 平均年齢20.22歳($SD = 1.22$)となった。調査の実施時期は、2005年11月であった。

質問紙の構成 (a) 甘え尺度: 研究1で作成した甘え尺度であり, “素直な甘え”5項目, “屈折した甘え”6項目, 合計11項目から成る。(b) 親和動機尺度: 親和動機尺度(杉浦, 2000)は, “拒否不安”9項目(e.g., 仲間から浮いているように見られたくない), “親和傾向”9項目(e.g., 人につきあうのが好きだ), 合計18項目から成る。(c) 怒り尺度: 怒り尺度(渡辺・小玉, 2001)は, “怒りの喚起されやすさ”6項目(e.g., ささいなことにもかつとしやすい方だ), “怒りの持続しやすさ”7項目(e.g., いったん怒ると, それがおさまるまでには時間がかかる), 合計13項目から成る。各尺度の信頼性は, “拒否不安”($\alpha = .88$), “親和傾向”($\alpha = .86$), “怒りの喚起されやすさ”($\alpha = .79$), “怒りの持続しやすさ”($\alpha = .81$)であり, 信頼性が確認されている。全体で42項目から成る質問紙を構成した。評定はすべて6段階評定法(研究1と同じ)で行い, 回答に要した時間はおよそ10分から15分であった。

結果と考察

まず, 甘え尺度, 親和動機尺度および怒り尺度の各下位尺度の信頼性係数を算出した。その結果, “素直な甘え”は $\alpha = .73$, “屈折した甘え”は $\alpha = .80$, “拒否不安”は $\alpha = .90$, “親和傾向”は $\alpha = .85$, “怒りの喚起されやすさ”は $\alpha = .82$, “怒りの持続しやすさ”は $\alpha = .76$ であり, いずれの尺度も信頼性が確認された。そのため, 相関係数の算出にはすべての項目を用いた。

素直な甘えの妥当性 次に, 甘え尺度と親和動機尺度および怒り尺度の相関係数を算出した。甘え尺度と親和動機尺度および怒り尺度の単相関をTABLE 3に示す。その結果, “素直な甘え”および“屈折した甘え”と関連指標のすべての下位尺度との間で有意な相関が示された。これらの相関関係は, 予想されたものとは異なる結果であった。これは, “素直な甘え”と“屈折した甘え”の間に有意な中程度の相関($r = .45, p < .01$)があるために生じたものであると考えられた。そのため,

TABLE 3 甘え尺度と親和動機尺度および怒り尺度の単相関

	α	素直な甘え	屈折した甘え	拒否不安	親和傾向	怒りの喚起
素直な甘え	.73	—	—	—	—	—
屈折した甘え	.80	.45 **	—	—	—	—
拒否不安	.90	.41 **	.39 **	—	—	—
親和傾向	.85	.62 **	.32 **	.50 **	—	—
怒りの喚起	.82	.20 **	.44 **	.18 *	.19 *	—
怒りの持続	.76	.28 **	.41 **	.22 **	.26 **	.67 **

* $p < .05$, ** $p < .01$

“素直な甘え”の妥当性は、“屈折した甘え”の影響をコントロールした偏相関係数を検討した。“屈折した甘え”をコントロールした“素直な甘え”と親和動機尺度および怒り尺度の偏相関をTABLE 4に示す。その結果，“素直な甘え”と“拒否不安”($r = .29, p < .01$)および“親和傾向”($r = .56, p < .01$)の間の相関関係は維持され，“素直な甘え”と“怒りの喚起されやすさ”($r = .01, n.s.$)および“怒りの持続しやすさ”($r = .12, n.s.$)の間には有意な相関関係は見られなかった。このことから，“素直な甘え”の妥当性が示された。

屈折した甘えの妥当性 同様に、“屈折した甘え”の妥当性は“素直な甘え”の影響をコントロールした偏相関係数を算出した。“素直な甘え”をコントロールした“屈折した甘え”と親和動機尺度および怒り尺度の偏相関をTABLE 5に示す。その結果，“屈折した甘え”と“怒りの喚起されやすさ”($r = .40, p < .01$)および“怒りの持続しやすさ”($r = .34, p < .01$)の間の相関関係は維持され，“屈折した甘え”と“親和傾向”($r = .06, n.s.$)の間には有意な相関関係は見られなかった。“屈折した甘え”と“拒否不安”($r = .26, p < .01$)の間の相関関係は維持されたままであったが，“屈折した甘え”および“拒否不安”が、ともに対人関係におけるネガティブな側面を測定しているため、相関したと考えられる。このことから，“屈折した甘え”の妥当性が示された。

TABLE 4 屈折した甘えをコントロールした素直な甘えと親和動機尺度および怒り尺度の偏相関

	素直な甘え	拒否不安	親和傾向	怒りの喚起
拒否不安	.29 **	—	—	—
親和傾向	.56 **	.43 **	—	—
怒りの喚起	.01	.02	.05	—
怒りの持続	.12	.06	.14	.60 **

** $p < .01$

TABLE 5 素直な甘えをコントロールした屈折した甘えと親和動機尺度および怒り尺度の偏相関

	屈折した甘え	拒否不安	親和傾向	怒りの喚起
拒否不安	.26 **	—	—	—
親和傾向	.06	.34 **	—	—
怒りの喚起	.40 **	.07	.07	—
怒りの持続	.34 **	.11	.11	.65 **

** $p < .01$

研究3 甘えと文化的自己観

目的

研究1および研究2では、日本人大学生を対象に甘え尺度を作成し、その信頼性および妥当性を検討した。研究3では、日本人大学生の社会的行動特徴としての甘えと文化的自己観との関連を検討する。

高田(2000)の相互独立的一協調的自己観尺度は、Markus & Kitayama(1991)が指摘する相

互協調的自己観および相互独立的自己観の概念に基づいて作成された尺度である。ふたつの異なる文化的自己観は、心理と文化の相互構成の過程において、中核となる自己についての前提であるとされている(北山, 1998)。比較文化研究の領域では、相互協調的自己観および相互独立的自己観という上位概念を扱って研究が行われてきた(e.g., Singelis, 1994; 高田, 1995)。そして、文化的自己観の下位概念(e.g., 思いやり)に注目して検討を行う研究も近年になって見られるようになってきた(e.g., 内田・北山, 2010)。研究3では、甘えが相互協調的自己観の一側面であることを実証するため、甘えと文化的自己観の関連を検討する。

相互独立的-一協調的自己観尺度(高田, 2000)には、他者との同化を重んじる認識の傾向および他者の眼差しや評価を気にする行動の傾向を測定する“相互協調性”と、他者とは異なった存在としての自分を認識する傾向および他者に配慮を払うことなく自分の判断に基づいて行動する傾向を測定する“相互独立性”の下位尺度がある。甘え尺度の下位尺度である“素直な甘え”および“屈折した甘え”と“相互協調性”の間には正の相関が予想される。一方、“素直な甘え”および“屈折した甘え”と“相互独立性”の間には無相関が予想される。

方 法

対象者 調査は、広島県内の国立大学で実施した。欠損値がない回答のみ分析の対象とした。そのため、分析対象者は155名(女性103名, 男性25名), 平均年齢20.23歳($SD = 0.90$)となった。調査の実施時期は、2006年11月であった。

質問紙の構成 (a) 甘え尺度: 研究1で作成した尺度であり、“素直な甘え”5項目, “屈折した甘え”6項目, 合計11項目から成る。(b) 相互独立的-相互協調的自己観尺度: 相互独立的-相互協調的自己観尺度(高田, 2000)は、“相互独立性”10項目(e.g., 自分の考えや行動が他人と違っていても気にならない), “相互協調性”10項目(e.g., 仲間の中での和を維持することは大切だと思う), 合計20項目から成る。各尺度の信頼性は、“相互独立性”($\alpha = .81$), “相互協調性”($\alpha = .78$), であり, 信頼性が確認されている。全体で31項目から成る質問紙を構成した。評定はすべて6段階評定法(研究1と同じ)で行い, 回答に要した時間はおよそ10分であった。

結果と考察

まず、甘え尺度および相互独立的-相互協調的自己観尺度の各下位尺度の信頼性係数を算出した。その結果、“素直な甘え”は $\alpha = .80$, “屈折した甘え”は $\alpha = .77$, “相互協調性”は $\alpha = .76$, “相互独立性”は $\alpha = .78$ であり, いずれの尺度も信頼性が確認された。そのため, 分析にはすべての項目を用いた。

甘え尺度と相互独立的-相互協調的自己観尺度の相関 次に、甘え尺度と相互独立的-相互協調的自己観尺度の相関係数を算出した。甘え尺度と相互独立的-相互協調的自己観尺度の相関をTABLE 6に示す。その結果, “素直な甘え”と“相互協調性”($r = .37, p < .01$)および“屈折した甘え”と“相互協調性”($r = .50, p < .01$)の間に正の相関関係が確認され, “素直な甘え”と“相互独立性”($r = -.13, n.s.$)および“屈折した甘え”と“相互独立性”($r = .08, n.s.$)の間には有

意な相関が見られなかった。また、“相互協調性”と“相互独立性”の間には弱い負の相関が見られた ($r = -.17, p < .05$)。

甘え尺度と相互独立的-相互協調的自己観尺度の因子分析 甘えは相互協調的自己観の一側面であることを示すため、“素直な甘え”、“屈折した甘え”、“相互協調性”および“相互独立性”の4変数を対象に、最尤法プロマックス回転による因子分析を行った。甘え尺度と相互独立的-相互協調的自己観尺度の因子分析結果をTABLE 7に示す。その結果、“素直な甘え”、“屈折した甘え”および“相互協調性”は第1因子に、“相互独立性”は第2因子に高い因子負荷量を示した。この結果から、甘えが相互協調性の一側面であることが示された。

TABLE 6 甘え尺度と相互独立的-相互協調的自己観尺度の相関

	α	素直な甘え	屈折した甘え	相互協調性
素直な甘え	.80	—	—	—
屈折した甘え	.77	.49 **	—	—
相互協調性	.76	.37 **	.50 **	—
相互独立性	.78	-.13	.08	-.17 *

* $p < .05$, ** $p < .01$

TABLE 7 甘え尺度と相互独立的-相互強調的自己観尺度の因子分析

	F1	F2
素直な甘え	.58	-.10
屈折した甘え	.86	.16
相互協調	.60	-.15
相互独立	-.06	.87

総合考察

研究1では、先行研究を概観する上で浮かび上がった問題点を指摘し、新たに甘え尺度を作成した。作成された甘え尺度は、“素直な甘え”および“屈折した甘え”の2因子11項目で構成され、各下位尺度および甘え尺度全体における信頼性、因子的妥当性および得点分布の正規性が確認された。研究2では、“素直な甘え”および“屈折した甘え”と関連した心理的傾向との相関を検討することにより妥当性の検討を行った。“素直な甘え”および“屈折した甘え”の影響力をコントロールした偏相関係数を算出し、“素直な甘え”は“拒否不安”および“親和傾向”と有意な正の相関を維持し、“屈折した甘え”は“怒りの喚起されやすさ”および“怒りの持続しやすさ”と有意な正の相関を維持し、甘え尺度の妥当性が示された。研究3では、甘え尺度を用いて日本人大学生の社会的行動特徴としての甘えと文化的自己観の関連を検討した。“素直な甘え”および“屈折した甘え”は“相互協調性”と有意な相関を示した。また、甘え尺度と相互独立的-相互協調的自己観尺度を対象にした因子分析では、“素直な甘え”、“屈折した甘え”および“相互協調性”が同一の因子に因子負荷量を示し、“相互独立性”が他の因子に因子負荷量を示したことから、甘え尺度は相互協調的

自己観の一側面であることが示された。独立したサンプルを対象にした3つの研究から、本研究で作成した甘え尺度の信頼性および妥当性が示された。

本研究では大学生を対象に研究を行ったが、多文化カウンセリング (Sue, Ivey, & Pedersen, 1996) において利用可能な知見を提出するには、大学生に限らず成人を対象とした調査によってデータを蓄積する必要がある。また、日本以外の文化において調査を行い、日本および他の文化における甘えの差異性についても検討しておく必要がある。相互協調的自己観が優勢な文化圏と相互独立的自己観が優勢な文化圏における甘えの比較により、社会への情緒的関与などの理論的な分析が可能になると考えられる。

また、児童および生徒への甘え尺度の適用も考えられる。近年、子どものさまざまな問題行動やいじめの背後に妬みが作用している可能性が指摘されている (土居, 1998) が、妬みは甘えと関連している感情である (土居, 2001)。土居 (2001) は、甘えと妬みを対比させ、相手に自分にはないものや優れたものがある場合、その恩恵にあずかるのが甘えであり、その良いものや優れたものを破壊したくなるのが妬みであるとした。また、甘えは対人関係にプラスに働き、妬みはマイナスに働くとした上で、妬み感情が比較的弱く、客観視できる場合に妬みは羨みとなるとした。Tesser, Campbell, & Smith (1984) の自己評価維持モデルの理論的枠組みでは、妬み感情は、比較される他者が自分と心理的に近い場合に喚起されるとしている。これらの知見に基づくと、甘え、妬みおよび羨みは密接に関連しており、個人間の関係性によって多様に変化するものであると言える。児童および生徒の甘えとそれに連動した心理的傾向を探索することは、問題行動にも有益な示唆を与えるだろう。

引用文献

- Benedict, R. (1946). *The chrysanthemum and the sword: Patterns of Japanese culture*. Houghton Mifflin. 長谷川松治 (訳) (1951). 菊と刀—日本文化の型— 社会思想社
- 土居健郎 (1971). 「甘え」の構造 弘文堂
- 土居健郎 (1975). 「甘え」雑考 弘文堂
- 土居健郎 (1985). 「表と裏」 弘文堂
- 土居健郎 (1987). 「甘え」の周辺 弘文堂
- 土居健郎 (1989). 「甘え」さまざま 弘文堂
- 土居健郎 (1993). 注釈「甘え」の構造 弘文堂
- 土居健郎 (1997). 「甘え」理論と精神分析 金剛出版
- 土居健郎 (1998). 「甘え」と「妬み」 児童心理, 52, 1-11.
- 土居健郎 (2001). 続「甘え」の構造 弘文堂
- 藤原武弘・黒川正流 (1981). 対人関係における「甘え」についての実証的研究 実験社会心理学研究, 21, 53-61.
- 浜口恵俊 (1988). 「日本らしさ」の再発見 講談社学術文庫

- 李 御寧 (1982). 「縮み」志向の日本人 学生社
- 北山 修 (1999). 日本語臨床 3 「甘え」について考える 聖和書店
- 北山 忍 (1998). 自己と感情 文化心理学による問いかけ 共立出版
- 北山 忍・唐澤真弓 (1995). 自己：文化心理学的視座 実験社会心理学研究, **35**, 133-163.
- 北山 忍・宮本百合 (2000). 文化心理学と洋の東西の巨視的比較—現代的意義と実証的知見— 心理学評論, **43**, 57-81.
- Markus, H. R., & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implications for cognition, emotion and motivation. *Psychological Review*, **98**, 224-253.
- 南 博 (1983). 日本的自我 岩波新書
- 中根千枝 (1967). タテ社会の人間関係 講談社現代新書
- Shweder, R. A., & Bourne, E. J. (1984). Does the concept of the person vary cross-culturally? In R. A. Shweder & R. A. LeVine (Eds.), *Culture theory: Essays on mind, self, and emotion*. Cambridge, England: Cambridge University Press. pp. 158-199.
- Singelis, T. M. (1994). The measurement of interdependent and independent self-construals. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **20**, 580-591.
- Sue, D. W., Ivey, A. E., & Pedersen, P. B. (1996). *A theory of multicultural counseling and therapy*. Pacific Grove, CA: Brooks / Cole.
- 杉浦 健 (2000). 2つの親和動機と対人的疎外感との関係—その発達的变化— 教育心理学研究, **48**, 352-360.
- 高田利武 (1995). 日本的自己の構造——下位様態と世代差—— 心理学研究, **66**, 213-218.
- 高田利武 (2000). 相互独立的—相互協調的自己観尺度に就いて 奈良大学総合研究所所報, **8**, 145-163.
- 竹友安彦 (1988). メタ言語としての「甘え」 思想, **768**, 123-125.
- Tesser, A., Campbell, J., & Smith, M. (1984). Friendship choice and performance: Self evaluation maintenance in children. *Journal of Personality and Social Psychology*, **55**, 695-709.
- Triandis, H. C. (1995). *Individualism and collectivism*. Boulder, CO: Westview Press.
- 内田由紀子・北山 忍 (2001). 思いやり尺度の作成と妥当性の検討 心理学研究, **72**, 275-282.
- 渡辺俊太郎・小玉正博 (2001). 怒り感情の喚起・持続傾向の測定—新しい怒り尺度の作成と信頼性・妥当性の検討— 健康心理学研究, **14**, 32-39.